

「とらわれのきっかけ」

私は、三人兄弟の長男として、両親の愛情をうけて、しかもきわめて過保護に育ちました。育った時代が敗戦の暗い時代であったためと、神経質で臆病な性格と、過保護による適応不安などが影響して、育った家庭環境のわりには、大らかな人間とはむしる反対に、大きくなるにつれて、取り越し苦労が多く、心配性な人間になっていったように思います。そしてできることなら外に出るよりも家の温かい環境のなかでいつまでもいることができたらしいのと願ったりしました。

そして自分のようにプライドの人一倍高い人間が、どうしてこんないまわしい嫌疑恐怖で悩まないといけないのか、こんなみじめな思いをしなければならないのかと、弟たちとひき比べて、長い間、自分の性格を呪ったものでした。

嫌疑恐怖のとらわれへのきっかけのひとつは、戦後間もなく、小学二年生のころの近所の友だちの自動車事故でした。当時、はやっていた遊びに「ろくぶて」というのがあり、「手袋の反対なあに」との問いに「ろくぶて」と言って逃げる子を追いかけて門から外にとび出したとき、逃げた子がちょうど、坂道を登ってきたトラックに片足をひかれ、ひざ下から切断するというショッキングな場面に出くわしたのです。

ところが、一緒に遊んでいたうちの一人が、無責任にも「君が追いかけて、後から押したのではないか」というような事実無根のことを他の人に言ったので、私はその場で否定し、家に帰ってから母に「僕は絶対に押していないのに、押したと言われてくやしい」と憤慨したことや、片足をひかれた子が退院してきたとき、その子に私がかしたのではないことを確認して、安心したことを覚えています。他人の悪意や思惑を気にする芽が、このころから生まれていたと思います。

小学校六年のころに当時、小学館から発行されていた月刊誌「小学六年生」に連載されていた「ぬれぎぬ小説」にひきつけられ、盗みの濡れぎぬを着せられた主人公の少女に痛く同情し、子ども心にも疑われること、落としいれられることの恐ろしさにショックを受けました。

そして中学一年のとき、小学校以来のクラスメイトでありながら、競争相手として先方が親子で露骨に対抗心をもちやっていた友だちがいたのですが、昼休みに鬼ごっこをした後で、その友だちが「五百円がない」と言ったのをきっかけに、あのぬれぎぬ小説のように、万一疑われ、おとしいれられたらこわい、彼ならそういうことをするかもしれないという考えにとらわれ、なんにもやましいことがないのに、内緒話に赤面したのをきっかけに、本当に自分を疑っているように思いこみました。